

P-15

筍による炎症反応の増悪についての検討

鐘紡記念病院和漢診療科¹⁾, 富山医科薬科大学医学部和漢診療学教室²⁾

○新谷卓弘¹⁾, 草野義弘²⁾, 伊藤 隆²⁾, 嶋田 豊²⁾, 喜多敏明²⁾, 柴原直利²⁾, 寺澤捷年²⁾

【目的】筍の過剰摂取によると考えられる炎症性疾患（慢性関節リウマチ，気管支喘息，アトピー性皮膚炎など）の活動性の増悪について，臨床ではしばしば経験される。

そこで，カラゲニン空気嚢炎症ラットモデルを用い，筍による炎症増悪作用についての基礎的検討を行った。

【方法】実験動物は，SD系雄性6週令ラット，体重180～210gを使用した。鶴藤らの方法により，カラゲニン空気嚢炎症モデルを作成し，筍（富山県黒河産の孟宗竹）抽出エキス，ならびに筍エキスをイオン交換により抽出した成分（塩基性成分と中性成分）を連日2mlづつ5日間経口摂取させ，空気嚢中の滲出液と肉芽重量の測定を行い，対照群（蒸留水摂取）と比較検討した。

【結果】筍摂取群では，有意に滲出液と肉芽重量が増加した。さらに，塩基性成分においても同様の結果が得られたが，中性成分では対照群と有意差を認めなかった。

次に，炎症増悪作用が有意であった塩基性成分をメタノールにより分画（A画分とB画分）して同様の実験を行い，B画分において滲出液の有意な増加が認められた。

そこでB画分を成分分析した結果，L-tyrosinとL-tryptophanと判明し，それぞれで同様の実験を行った結果，L-tryptophan摂取群に有意な滲出液と肉芽重量の増加を認め，L-tyrosin群では対照群と有意差がなかった。

【考察】臨床では，L-tryptophanの経口摂取による好酸球増多と筋肉痛を発症するeosinophilia-myalgia syndromeが提唱されているが¹⁾，本機序は経口摂取されたL-tryptophanが生体でserotoninに代謝され，この結果炎症反応が増悪するものとされている。本実験結果と考え併せると，筍による炎症増悪の一因としてL-tryptophanの関与が示唆された。

【結論】筍の経口摂取による炎症増悪の一因子として，L-tryptophanの関与が推察された。

1) Eidson, M. et al.: L-tryptophan and eosinophilia-myalgia syndrome in New Mexico. Lancet I 335, 645-648, 1990.